



幼児における認識の発達

波 多 野 完 治

7に5を加えると、そのどちらにも含まれていない12という性質が新らしく加わる。また、水は熱すれば膨脹する。水は飲むものであり冷たい液体であるということは知られているが、水をあたためるとふきこぼれて大きくなるということは知られていない。これは水についての知識には入らないのである。このように、今までにないものが現われてくることを、**先天的総合判断**と言う。このような先天的総合判断のある認識が本當の認識である。先天的総合判断は頭の中でこねくり回していても出てくるものではなく、経験しなければならぬ。この経験したものを頭の中で考えねばならない。つまり、認識においては頭の中で考えることを重視するのである。さて、先天的総合判断ができるために経験がだいじなものであるということがわかるにつれて、経験のもとになるもの

は、いったい何か、ということが問題になってくる。頭の中で考える前に、行動するということがあるに相違ない。考えるということの原始的なやり方は行動することである。幼児の認識は頭の中で考えるものではなくて行動と経験の結びつきなのである。ここで問題は、行動的認識がだんだん成長するにつれて、頭の中で考えるようになってくることである。いったい、幼児の数字から中学の代数的なものへ移るのはどういうことなのか？これが認識問題を盛んにしたゆえんであるが、要するに、幼児の場合は、行動がどんな形で内化するかということを抑える必要があるわけである。

「認識」は頭の中で考えたような認識すなわち理性的認識と、感覚や経験で捉えて理性化していないところの感性的認識の二つに大別できる。理性的認識がつかまれるためには感

性的認識がなければならぬが、感性的認識から理性的認識への発展に問題がある。

幼児の世界は、歩行と離乳とから始まっていると考えてよい。そして、この頃の子どもはことばを持っている。赤ん坊は離乳によって身体性を得、歩行によって空間・物質を知り、更にことばによって社会的な性質を得る。これらの三つの武器は大切なものであるが、これはおとなの持っているものではない。形は似ているけれどもその内容が違っているのである。

感性的認識は歩行に伴うものである。勿論、ものを見たり聞いたりすることは、生後三か月位でおとなの90%ほどは整ってくる。しかし、この感覚を積極的に使うことはない。それが幼児になると、歩行にしたがって非常に積極的になってくる。目で見回すことができるし、歩いてもののまわりを廻ることが出来る。耳をそばだて、またそこへ近づいて行って聞くことができる。さわることにしても、異なった角度からさわる事ができるようになる。これは、感覚の世界から観察的世界に入ったことである。しかし、この頃の子どもには理性的認識がないために、そのどこが重要かがわからない。形はわかって、それ以上のはわからないのである。

二十世紀の初め、モンテソリーは観察を重要視して、幼児

の色や音について観察訓練をおこなった。これは良いことであるが、理性的認識ができてきた時にそれを上手に応用できることの方が大切であり、観察そのものが直ちに理性的認識に発達すると考えるのは誤りである。幼児の理性的認識は原始的なものであるが、これはことばを伴いながらするものである。感性はそれ自身も勿論であるが理性的認識に発展するものとして捉えるとき、より大切であると言わねばならない。

数は子どもの理性的認識の徹底したものであるが、この中で困難なのは0である。ないものがあるもので表わそうとするのであるから理性的認識の中で最も高度のものである。この0は小学校一年生の時に教えられるのであるが、0の加法はわたしどもの調査だと四年生ぐらいまで間違えやすい。これは、感性的なものが理性的なものを誤らせてしまっているからである。理性は感性的なものにより促進されることが多ければ、それだけでできるものではなく、時にはそれを逆転させ、否定しなければならぬのである。したがって、感性の中のどの部分を重要視するかが大切なことになる。このように考えてくると、これは観察のみでなく、それに伴うことばを考える必要があり、ことばと並んで手も重要なものとなってくるのである。

手

足の空間が発達すると手の空間（把握空間）が促進される。歩行によってものを掴む方法や位置を考えるようになってくると、手の認識を発達させておかないと都合が悪い。

幼児の段階では、なるべく両手を使えるようにするのがよい。大抵の幼児は両手ききであるが、ほおっておけば少しでもきく方をどんどん使って極端化するのである。だから、つみ木やボール遊びは両手でさせるのがよい。この訓練をつんだ後に分化させることはよいが、初めから偏ったやり方をさせるのは、子どもの理性的認識をうまくのばすためによくない。手の問題は単に運動だけでなく、触の問題である。触は運動を伴って生まれるものであり、理性的認識の手前のものである。手を使うことは頭を使うことへの段階である。それによって工夫もなされ、また確信をもつことができるのである。

ことばと映像

認識ということが問題になると、ことばは単にことばとしてではなく、思考の問題とからめて考えることが大切になってくる。そして幼児の場合には、物がなくても物事が考えられるということばの意義は必要ない。

事物とことばとの対応関係から重要なものに、その問題が

ある。これを認識の面から考えると幼児のうそは存在しない。

数は、五才までは年令と同じ位しか認識されないが、五才以上になれば増加する。この場合、二と三で五、というような数に確実に数の関係をおさえることが必要である。子どもの数の観念は、分離すると増し、まとめると減る。これは恒常性の考え方がのみこめていない証拠である。したがって数の問題は、感覚的なものと結びつけておさえることが大切である。数を多く数えることよりも、ある数の量（ $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ ）の観念をのみこませた方がよい。

ことばでもう一つ大切なことは、自己中心性、ということである。子どもは自分が見えるものは他人にも見えるものだと思っている。このことがことばの上にも影響して、主語の脱落や、自分に興味のあることだけを話すというような形になってあらわれてくるのである。このような時に話し方が悪いということ子どもに言うとき劣等感をもち易いから、自己中心的でなくなるようなもっていきかたが必要である。自己中心なことばという点では、幼稚園に行った者と行かない者とは、小学校入学当時、その違いがはっきりあらわれてくる。家庭だけで過ごしていると、相手のことを考えて行動することもなく、また客観的な見方ができないので理性的認

識に欠けている子どもになるからである。

ことばは、おとながつくって子どもに与えるものである。ところが、子どもが事物から自分で作りあげたシンボリズムは「映像」である。感性的なものが理性的なものに発展するのには、やり方に応じて感性的なものが映像により置換されることが重要である。

映像は、遊び、模倣、夢の三つに分けられる。この中で一番象徴的映像が表われるのは夢である。

模倣は子どもが客観的に受けた印象を主観的にまねしていくことである。しかし、次第に上手、下手が自分でもわかるようになり、上手な模倣のための学習をするようになる。模倣は本能ではない。一才半から二才半の間にのびてきた認識が、三才以後非常に発達する。ちょうどこの頃模倣能力がのび、ことばを多く覚えるのである。映像は模倣が印象によって内化されたものであると心理学者は考えている。このように考えるならば、映像は、子どもだけがこしらえた内化の表われであると言えるのである。

テレビは客観的な映像である。これを子どもが受ける場合には、受け身でなく、も一度頭の中で印象づけ、働きかけ、主観的に置きかえる。小学校五、六年生になれば、映像がの

び想像性が発達して主体的になっている。こうした時にはテレビは重要性をもってくるのであるが、その番組の良悪が問題である。幼稚園の年少では生活の基礎の上にたつ空想性が出てくるものがよい。グリムやアラビアンナイトのような空想話は、小学校三、四年に適當である。幼児には生活に結びついた童話が要求される。生活童話が従来子どもに喜ばれなかったのは、これまで作られたものの中に良いものがなかったからで、本来、このようなものは子どもの認識能力を発達させるために役立つものである。

遊びは幼児にとっては認識の機会である。これは想像と結びついたものであるが、子どもの主体的生活に働きかけるものである。遊びの中で、あるものがあるものに代用される場合には、自由な象徴活動が盛んにおこなわれている。これが他人にわかるかどうかは問題ではない。この時期の遊び道具は、子どもに象徴的刺戟を与えるものなら何でもよい。安全でこわれない、という多少の制約はあっても、身のまわりにあるもの何でも利用して、子どもの映像性を大いにのばしてやりたいものである。

理性的認識への契機として、感覺的運動的認識が大切なるのである。